

「一灯照隅」の半生
～大城常夫教授の退官に寄せて～

A Candle in the Nook
～Dedication to Professor Tsuneo Oshiro～

伊波 美智子*
(Michiko IHA)

この3月をもって大城常夫教授は定年を迎えられます。まずはつつがなく35年余にわたる職務を全うされたことに「おめでとうございます」とお祝いを述べるとともに、観光科学科の発足以来、先頭に立って道を拓いてくださったことに観光科学科一同を代表して感謝申し上げます。公的には大学の職務をいわば「卒業」されるわけですが、新たなご活躍を祈りつつ今後とも後進をご指導して下さることを願い、『琉球大学 観光科学』の記念すべき創刊号を大城常夫先生に献呈いたします。

先生は、沖縄の施政権がアメリカから日本に返還される前年の昭和46年（1971年）に、国立大学に移行するための組織整備がすすめられていた経済学科に経済政策講座講師として迎えられました。以来35年余になります。先生の琉球大学との関わりを振り返りますと、復帰以前の琉球大学法文学部経済学科に在籍しておられた4年間、アメリカ（コネチカット大学大学院）から帰国して非常勤講師をしておられた3年半を加え、43年間の長きにわたって琉球大学と関わってきたこととなります。

琉球大学における先生の軌跡を辿ってみますと、教育、研究、社会貢献、そして大学の管理運営と多岐に亘る活動歴にあらためて感嘆させられます。とくに地域政策の専門家として、沖縄振興開発審議会委員をはじめ市町村・県・国・経済団体等の各種の審議会・委員会の委員（委員長、会長、座長等を含む）を数多く務められ、その数は延べ100近くにもなります。これらの豊富なネットワークを通して培われた経験と人脈は、教育・研究そして観光科学科長、留学生センター長、アジア太平洋島嶼研究センター長としての職務に遺憾なく発揮され、大学に還元されてきました。その代表的な教育業績の例として、学際的・実践的な講義が好評であった共通教育高学年次用総合科目「現代社会の課題—21世紀への挑戦」、経済学科専門科目の「実践経済学」が挙げられます。近々では、去る2月7日に開催された「21世紀型沖縄観光ビジョン：新たなツーリズムの展開を求めて」をテーマとする国際シンポジウムが各界からの支援を得て大成功を収めました。

研究面では、東京工業大学、英国ケンブリッジ大学で研修され、沖縄経済学会（運営委員長、会長、理事）、日本経済政策学会、日本地域学会の学会においても活躍され、東アジア地域国際シンポジウム等を主宰されました。玉著の『地域発展と組織化』（昭和60年）

*琉球大学法文学部観光科学科

は沖縄の地域開発草創期を代表する著作であり、また『沖縄イニシアティブー沖縄発・知的戦略』（平成12年）は県内に大きな論争を巻き起こしました。「沖縄に独立経済はない」と言い切る先生ですが、復帰以来、沖縄の振興計画・政策立案に関わり県内外に多くの知己をもつ先生は稲嶺県政を支えるブレーンのお一人として、沖縄県の経済政策の推進に大きく貢献されました。

この原稿を書くにあたって、先生にインタビューをしましたので、その中から一部をご紹介します。

Q. 在職中で印象に残っていることは？

- ① 国立大学移管と共に琉大にきた。ミシガン大学をモデルにしたアメリカスタイルから縦割りの日本的システムに代わり、学科目で人事が行われるようになったこと。地域開発論、産業組織論等の新しい授業科目を作った。
- ② アジア太平洋島嶼センターは省令施設ではなく学内措置による施設となったが、法人化の時だったので文科省との折衝で苦労し2年かかった。
- ③ 内地留学では、全国町村会の過疎問題調査会の仕事を1年やり、全国の地域調査をする機会に恵まれた。

Q. 気に入っている業績（論文、研究テーマ）は？

- ① 全国調査をしたことで、日本の多様性を認識し全国に知己を得た。全国の地域づくりの成功事例や失敗事例をみてきたが、演繹的な方法では地域づくりの解は求められないと知った。また、本土対沖縄という2項対立ではないことも実感した。たとえば、沖縄タイムや模合（講）は沖縄だけのものではなく、農村社会（亜熱帯、発展途上国）のリズムであり、助け合いであること、沖縄の抱える問題は農村社会から一足飛びにサービス産業社会へ移行したことから生じたものであること、等々である。これらを琉球新報で連載したものが『地域発展と組織化』として出版され、沖縄版として琉球新報の移動編集局が企画された。
- ② 沖縄経済開発研究所時代からさまざまなプロジェクトを手がけてきたが、実現した構想の中でもっとも大きなプロジェクトは、名桜大学の設立である。渡久地市長時代のやんばる大学構想で、北海道紋別市の道東大学（私立大学）の事例をヒントに、大学を中心にした地域おこし、大学誘致で地域づくりをやろうと考えた。
- ③ 琉大経済研究所での先輩諸先生方との議論を経てやった仕事。復帰直後につくった「大那覇圏構想」は今みてもなかなかいいし、復帰時の通貨切り替えは360円を主張して新聞紙上で論争を展開したこともある。県民財産は360円で読み替えられた。

ところで大城教授は、高校時代は三段跳びの選手で運動が好き、囲碁は4段の腕前という文武両道、学生時代の成績も優秀でした。当時、沖縄の帝王といわれたP.A.キャラウェイ高等弁務官が来賓として出席した卒業式に卒業生総代として読んだ答辞には、J.F. ケネディの『平和の戦略』から民主主義に関する部分を引用したという気骨の持ち主でもあります。

大城教授と筆者は少なからぬご縁があって、観光科学科の発足時からご一緒しているばかりでなく、琉球大学に赴任する以前にも財団法人沖縄経済開発研究所で約1年余、ご指導いただきました。このようなことから、折々の雑談で個人的なことが話題になることもありました。硬派の経済学者として「こわもて」する先生ですが、たいへん人情に厚く、愛妻家で子煩悩という、人間味豊かな一面も持っています。先生のお話からは、家庭にあっては家庭菜園を耕し、奥様が体調を崩されたときには家事を代わり子どもの世話をするなど、奥様への深い愛情がうかがえます。退職後の生活設計をうかがうと、仕事に忙しくわがままで負担をかけていた分、奥様との2人の時間を大切に、イギリスでの生活や2人で旅行したヨーロッパ、アメリカのこと等『夫婦二人の旅』について書きたい、と照れながらのろけておられました。

最後に、座右の銘は？とお聞きしたら、最澄の「一灯照隅」という言葉が返ってきました。全国の地域開発事例を見てまわり、沖縄の地で経済振興政策に取り組んでこられた先生の半生を象徴する言葉といえるかもしれません。最後に、奥様と末永くお幸せに暮らされますよう祈って饞の辞といたします。